

風景の中で 15

不確定性の音楽

図書館長 井上 郷子

《4分33秒》で知られ、「偶然性の音楽」の創始者であるアメリカの作曲家、ジョン・ケージ。彼が1992年に亡くなった後、「ポスト・ケージ世代」と呼ばれる音楽家たちは、ケージの思想を継承し彼の創作から影響を受けつつ、独自の創作活動を展開しました。その中で、彼らは、音の高さや長さを楽譜に固定して記譜するのではなく、図形や言葉を通して作品の音響的な完成を演奏者に委ねる、という作品、つまり、きわめて不確定性要素を含む作品を生み出してきたのです。

不確定性要素を含む作品は様々です。例えばケージの作品のように、不確定性要素がある種の〈意図のない音楽〉(ダニエル・シャルル)となっている場合には、再現される音響は作曲家ですら予想することができません。また音響を前もって規定することのできない楽器(例えば、《木の子供》(1975)という作品では、演奏者が自ら選んだ〈植物〉を演奏します)をあえて指定して、意図的に演奏の結果を不確定にする場合もあります。

他には演奏者の創造力を引き出すための手段として作曲者が「不確定性要素」を導入する場合があります。このような場合には「意図のない音楽」が企図されたわけではなく、演奏者が的確に

理解してくれさえすれば、作曲者によって事前に規定された音楽の実現が担保されていると考えているのです。そのために演奏者にとっては(限られた条件内であるとはいえ)演奏の自由度が増し、それに比例して、より感覚を研ぎ澄まして音に集中することができるという利点があります。また作曲者が示したいいくつかの断片の演奏する順序を演奏者が決定できるような場合では、演奏者は時間をかけて楽譜の背後にある意図を読み込むことができます。

実際、不確定性要素と作品や演奏との関係は様々で、同一作品において、これら混在することも珍しくなく、それが作品自体の個性となっていることは言うまでもありません。演奏に際しては、新たな演奏技術が要求されることもあって、繊細な音色表現はきわめて多岐にわたり、時間の捉え方のセンスも要求されます。

図書館には不確定性要素をもった音楽の楽譜や書籍がありますので、興味がある人はリサーチしてみてください。

『ジョン・ケージ 小鳥たちのために』
ジョン・ケージ/ダニエル・シャルル著;青山マミ訳
青土社 1982 請求番号●C34-171ほか

資料の部屋 14

秋の夜長の音楽小説

相馬 香

日に日に夜の時間が長くなるこの時期。皆さんは夜時間をどのように過ごしているのでしょうか?私は就寝前になるべく活字を読むようにしています。活字を読むとスムーズに眠りに入れるように感じます。心地よい空気感の中、スマホの電源をオフして本の世界に入り込む。今年こそ読書の秋を楽しんでみませんか?

今回紹介する資料は秋の夜長におすすめの『羊と鋼の森』です。2016年に本屋大賞を受賞し、映画化もされた小説です。一人の青年がひよんなことからピアノの調律師と出会い、ピアノの調律師に魅了され自らも調律師を目指し成長していく過程を書いたお話です。北海道の四季の情景と主人公の心情を交差させつつ、静かな時の流れの中、主人公が周囲の人々と関わりながら一步步調律師になっていく様子や心情が丁寧に描かれています。

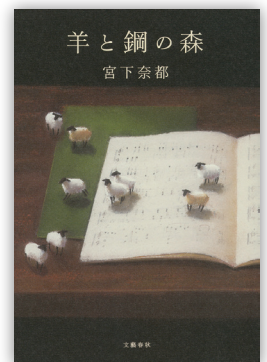
タイトルだけを見るとピアノの調律師が主人公のお話とは想像しにくいですが、読み進めるとこのタイトルの意味も明らかになります。また、タイトルだけでなく本文も比喩が多用されています。話の内容はもちろん想像をかき立てる多彩な表現も見逃せません。

『羊と鋼の森』のように音楽を題材にしている小説を図書館では音楽小説と呼び、ライブラリーホールの書架にまとめて並べています。映像化されたものも多数あります。興味のある方は是非ライブラリーホールの音楽小説コーナーに足を運んでみてください。

まだまだ落ち着かない社会状況ですが、こんな時こそゆっくり音楽小説の世界に浸ってみてはいかがでしょうか。

『羊と鋼の森』 宮下奈都著
文藝春秋 2015
請求記号●音楽小説||MIY

※同タイトルのCD・DVDも所蔵しています。
*CD『羊と鋼の森』 請求番号●XD74720
*DVD『羊と鋼の森』 請求番号●VX752



そうま かおり(図書館嘱託職員) ● 2023年3月開催予定のWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)を今から心待ちにしています。ガンバレ日本!